

2021/08/01

ヨハネの福音書 講解メッセージ⑥1

『イエスの死 Part II』 マタイの福音書から

先週、ヨハネの福音書で「イエスの死」について述べましたが、この部分は重要ですので、マタイの福音書からも見ておきます。

「こうして、イエスを十字架につけてから、彼らはくじを引いて、イエスの着物を分け、そこにすわって、イエスの見張りをした。また、イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王イエスである」と書いた罪状書きを掲げた。そのとき、イエスといっしょに、ふたりの強盗が、ひとり右に、ひとり左に、十字架につけられた。道を行く人々は、頭を振りながらイエスをののしって、言った。「神殿を打ちこわして三日で建てる人よ。もし、神の子なら、自分を救ってみろ。十字架から降りて来い。」同じように、祭司長たちも律法学者、長老たちといっしょになって、イエスをあざけて言った。「彼は他人を救ったが、自分は救えない。イスラエルの王だ。今、十字架から降りてもらおうか。そうしたら、われわれは信じるから。彼は神により頼んでいる。もし神のお気に入りなら、いま救っていただくがいい。『わたしは神の子だ』と言っているのだから。」イエスといっしょに十字架につけられた強盗どもも、同じようにイエスをののしった。」(マタイ 27:35-44)

イエス様が十字架につけられた時、多くの方がイエス様をののしり、イエスは敗北したと思われました。しかし、イエス様の十字架は、敗北ではなく勝利です。

先週は、ヨハネの福音書を通してイエス・キリストの十字架について学びましたが、今週は、さらに別の角度から見てみましょう。

## ■この世界に対する十字架の意味

「さて、十二時から、全地が暗くなって、三時まで続いた。」(マタイ 27:45)

イエス様が十字架につけられた後、自然現象によって太陽の光がさえぎられ、昼の12時だというのに、あたりは暗くなりました。

太陽は古来から神の象徴です。その太陽の光がさえぎられるとは、この世を支配してきた権威に、終わりが来たことを表しています。そして、午後3時に再び太陽の光が照りわたるのは、新たな権威が来たことの象徴です。それは真の権威です。ヨハネの福音書は、それを「やみの中に光が輝く」と表しています。

つまり、イエス・キリストの十字架は、この世の支配が終わり、キリストが私たちの権威

となることを示唆しているのです。そして、この時、さらに次のような出来事が起きました。

「すると、見よ。神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。そして、地が揺れ動き、岩が裂けた。」(マタイ 27:51)

神殿の幕が裂けたとは、隔ての壁が打ち壊されたということです。

当時は、人が神と直接話すなど許されず、神と人との間には常に権威が横たわっていました。神の権威を預かった祭司長を介して神と交わるのが普通で、神の住処である至聖所に、一般の人が入ることはできなかったのです。

今、神と私たちを隔てている壁は、律法です。多くの人は、良いことをしたら天国に行ける、神に愛されるには立派なことをしなければいけない、と思い込んでいます。つまり、神様との間に「行い」という権威を持ってこようとしています。

しかし、イエス・キリストの十字架は、それらの壁を打ち壊し、権威によって神に近づくのではなく、誰でも直接神に祈り、御言葉をいただき、直接交わることができることを教えてくれました。イエス・キリストの十字架は、古い権威や律法という隔ての壁を打ち壊すものであったのです。

「キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです。このことは、二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり、また、両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです。敵意は十字架によって葬り去られました。」(エペソ 2:14-16)

キリストは、十字架の死によって、敵意である律法を廃棄したのです。神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けたという出来事は、これを象徴的に表しています。この世の権威が終わり、霊と真による礼拝の時代が訪れたのです。

さらに、神殿の幕が裂けた時、地が揺れ動き、岩が裂けました。大きな地震が起きたことがわかります。

地や岩は、私たちの土台を表しています。土台がしっかりしていない家は、どんなに見栄えが良くても、すぐに壊れてしまいます。私たちの土台、心のよりどころはどこにあるのでしょうか。

岩が動くとは、揺れ動き壊れるものは、よりどころではなくなるということを表しています。一般的に、人は、富をよりどころとします。しかし、真の土台は、イエス・キリストです。神を土台とし、神をよりどころとする人生を建て上げなさいと、神様は教えておられます。

崩れるものをよりどころにしていると、いざ問題が起きた時に不安です。この世の富や評判は、すべての人に訪れる死の恐怖を解決することはできません。私たちにとっての真のよ

りどころは、イエス・キリストです。

「また、墓が開いて、眠っていた多くの聖徒たちのからだが生き返った。そして、イエスの復活の後に墓から出て来て、聖都に入って多くの人に現れた。」

(マタイ 27:52-53)

「眠っていた者」とは、神を信頼することなく眠った状態にあった者のことです。つまり、すべての人間は眠った状態にあったのですが、土台をキリストに変えたことによって、キリストと共に生きる者となったのです。

「百人隊長および彼といっしょにイエスの見張りをしていた人々は、地震やいろいろの出来事を見て、非常な恐れを感じ、「この方はまことに神の子であった」と言った。」

(マタイ 27:54)

百人隊長や兵隊たちは、恐れを感じたことによって、神を信じることができました。恐れは信仰の入り口です。恐怖を覚えることで、神により頼む者となることができるからです。ですから、恐れることは幸いです。イエス・キリストは、山上の垂訓の中で、嘆き悲しむ者、恐れを感じる者、不安な者は皆、神により頼む者になれるから、幸いであると教えておられます。ここに神の深い恵みがあります。聖書は繰り返し「恐れよ」と言っていますが、それは、まことに神により頼むことができるからです。恐れのない人、不安のない人は、かえって災いです。

「結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。」(伝道者の書 12:13)

不安や恐れを恥じる必要はありません。不安や恐れを感じる時は、揺れる大地に心のよりどころを置くのではなく、揺れない大地、すなわち、この世界を造られた神に土台を置きましょう。

## ■十字架の霊的な意味

この世界に死が入り、朽ちる世界となったのは、悪魔に操られた蛇がアダムとエバを欺いて罪を犯させたからであると聖書は教えています(創世記3章)。悪魔とは、死をつかさどる者です。悪魔の起源はわかりません。しかし、天地創造の前から悪魔は存在しています。

「地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上であり、神の霊が水の上を動いていた。」(創世記 1:2)

やみとは、悪魔を象徴する言葉です。このように、創世記のはじめから悪魔の存在は示唆されています。

「さて、神である主が造られたあらゆる野の獣のうちで、蛇が一番狡猾であった。(最も賢かった。) 蛇は女に言った。「あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか。」(創世記 3:1) \*括弧は補足

新改訳聖書では「狡猾」と訳されていますが、原文では「賢い」と記されており、蛇の賢さに悪いイメージはありません。また、今のような這う姿でもありませんでしたから、むしろ、賢い蛇と人間は非常に親しい関係にあったと考えられます。そのため、蛇が語り掛けてくるという事実を人は受け入れ、その言葉を信じてしまったのです。

しかし、ここで人は罪を犯しました。罪とは、神を信じないことです。つまり、蛇の言葉を信じたことで神と異なる思いを持ってしまったことが罪なのです。神と異なる思いを持つと、神との間に隔ての壁が出来ます。これが「死が入り込む」ということで、神が認識できなくなるということです。その後のアダムとエバの様子から、神が見えなくなり、自分の姿しか認識できなくなったことが見て取れます。

この事態を招いた悪魔に対して、神様は次のように言われました。

「わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつく。」  
(創世記 3:15)

これは、神様が初めて語られた預言です。神様は、「キリストが十字架で悪魔の頭を踏み砕く。」つまり、「悪魔を滅ぼす」と言われました。そして、人に対しては、さばくのではなく、彼らを守ってくださったのです。

「神である主は、アダムとその妻のために、皮の衣を作り、彼らに着せてくださった。」  
(創世記 3:21)

「皮の衣」とは、動物を犠牲にしたことを表しています。これは、いけにえの象徴で、神がご自分をいけにえとしてささげることによって、私たちを守ることを表しているのです。

## ■全き愛を示すため

神様は、悪魔の頭を踏み砕くと言われましたが、それはどのようなことなのでしょう。悪魔が使う武器は恐怖です。恐れを武器にして、人を閉じ込めます。それに対する神の武器は、全き愛です。全き愛とは、人がその友のためにいのちを捨てることだと、イエス様は言われました。神が、人のために、ご自分のいのちをささげる以上の愛はありません。この愛が恐れを締め出すのです。悪魔を滅ぼすために必要なのは、全き愛です。そのためにイエス

様は十字架に架かられたのです。

「人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」(ヨハネ 15:13)

「愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。」(Iヨハネ 4:18)

私たちが恐れに打ち勝つには、イエス様の十字架の愛を知るしかありません。神であるイエス様にとっていのちを捨てるとは、神との関係を断ち切ることです。本当の死とは、肉体の死ではなく、神との関係が断ち切られることなのです。これは、イエスが経験したことのない、想像を絶する苦しみです。

「三時ごろ、イエスは大声で、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と叫ばれた。これは、「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。すると、それを聞いて、そこに立っていた人々のうち、ある人たちは、「この人はエリヤを呼んでいる」と言った。また、彼らのひとりがすぐ走って行って、海綿を取り、それに酸いぶどう酒を含ませて、葦の棒につけ、イエスに飲ませようとした。ほかの者たちは、「私たちはエリヤが助けに来るかどうかわかることとしよう」と言った。そのとき、イエスはもう一度大声で叫んで、息を引き取られた。」

(マタイ 27:46-50)

イエス様は、十字架によって、父なる神、聖霊なる神との関係が完全に断ち切られました。これはイエス様だけの苦しみではなく、父なる神も聖霊様も、イエス様と同様に苦しまれたのです。こうして全き愛は実行されました。そして、イエス・キリストはよみに下って、死をつかさどるものに勝利し、3日目によみがえられたのです。

つまり、悪魔を全き愛によって滅ぼすということが、十字架の霊的な意味になります。こうして、新しい神の権威がスタートしたのです。

「そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放して下さるためでした。」(ヘブル 2:14-15)

こうして、創世記3章の預言は成就しました。

イエス・キリストの十字架の死には本当に深い意味があります。この世の君が裁かれ、やみの中に新たな権威が示されたのです。十字架は一見敗北に見えますが、敗北したのは「この世」であって、実際は新しい世界の始まりです。死をつかさどる悪魔が滅ぼされ、新たにいのちが示されるときとなったのです。その始まりが復活です。

死が入り込んで以来、人は死んだ状態で、土に帰るしかない存在です。死人にとっての希望は、死に対して死に、新たな土台によって生きることです。イエス・キリストの十字架の死は、その希望を与えるものなのです。キリストは、復活と同時に墓からよみがえり、死んだ者が生きた者となることを示し、すでに永遠のいのちを持っていることを示してくださいました。私たちはイエス・キリストと同じように死に、生きる者となったのです。死は、生きている者にとっては敗北ですが、死んでいる者にとっては希望です。人は皆死んでいます。しかし、十字架によって、死んだ者が生きたものとなり、私たちはよみがえったのです。これが永遠のいのちを持っているということです。十字架は、キリストと共に死に、キリストと共に生きるようになるという希望を示してくれました。だから、十字架以外に誇りがあってはならないと聖書は教えます。

私たちは、多くの罪を犯してきましたが、死ぬことでそれらも帳消しになり、すべて和解されるのです。すべてが消えてなくなり、死からいのちに移されました。十字架の死に預かって、生きる者となったのです。だから、今私たちが生きているのは、私たちが生きているのではなく、キリストが生きておられると言われているのです。キリストのいのちを身におびて、キリストと共に生きています。キリストにあって生きる者となった私たちは、もう死とは無関係になりました。これが十字架の福音です。

全地は暗くなって、世界が終わり、新しい世界が始まります。今、あなたのよりどころはどこにあるのでしょうか。自分のよりどころを考えましょう。